富山市の遺跡物語

百塚住吉遺跡の「前方後円墳」と「前方後方墳」

写真は、古墳時代前期（約 1,700 年前）の「前方後円墳」と「前方後方墳」です（5P 参照）。

「前方後円墳」が全長約 24m、「前方後方墳」が全長約 16m を測ります。いずれも墳丘裾に周溝がめぐらされ、古相を示す低平な前方部が特徴です。古墳の形態や規模から、葬られた人物はこの地域の首長層と推測されます。

畿内系の「前方後円墳」は西日本、東海系の「前方後方墳」は東日本で多くみられ、富山県には「前方後円墳」に先行して「前方後方墳」が出現しました。当時、各地の古墳は時代とともに畿内を中心とした大きな時代の流れに歩調を合わせていきましたが、その受容のあり方は様々でした。

「前方後方墳」と「前方後円墳」の 2 系統の古墳が共存する状況からは、新たな時代に向けて変動する社会情勢が読み取れます。神通川左岸の交通の要所に位置する「前方後円墳」は、畿内勢力の東進を意味するのでしょうか。県内での「前方後円墳」の築造意義を考える上で、重要な鍵を握る遺跡といえます。

また「百塚」という地名は、多くの古墳の存在を暗示している可能性もあり、今後の調査にますます期待がかかります。

（大野英子）

王塚・千坊山遺跡群国指定記念事業「婦負の国～弥生ものがたり～」

展示コーナー　2005.9.8～9.17

王塚・千坊山遺跡群国指定記念講演会「婦負の国～弥生ものがたり～」に併せて、婦中ふれあい館エントランスホールにて開催しました。

王塚・千坊山遺跡群の航空写真や発掘状況写真、出土品写真等のパネルのほか、今回追加指定された六治古塚墳墓・勅使塚古墳の模型等を展示し、来場者に遺跡群の特徴や概要が分かるようにしました。

遺跡探訪　2005.9.17 9:30～12:00

晴天の下、富山市内や県内外の方々、35人が参加されました。

埋蔵文化財センター堀内学芸員の説明のもと、参加された方々は王塚・千坊山遺跡群を実際に歩き、身近に四隅突出型墳丘墓・巨大な古墳等を見て、「婦負の国」を実感しているようでした。

現地では、「古墳は王が生きている内に造ったのか、それとも亡くなってから造ったのか？」「墳丘墓と古墳の違いは何ですか？」などと熱心に質問されていました。

婦中埋蔵文化財資料館

遺跡探訪ルート

婦中埋蔵文化財資料館（出土品の見学）
↓
王塚古墳（大型前方後方墳）
↓
富崎墳墓群（3基の四隅突出型墳丘墓）
↓
富崎千里古墳群南群（14基の古墳が並ぶ）

王塚古墳

富崎3号墓（富崎墳墓群）

富崎千里9号墳（富崎千里古墳群）

記念講演会　　2005.9.17 13:00～15:30

婦中ふれあい館ふれあいホールにて、王塚・千坊山遺跡群国指定記念「婦負の国～弥生ものがたり～」記念講演会を開催し、県内外から150名を超える参加者がありました。

□史跡紹介　「千坊山遺跡群ってどんな遺跡？」
大野英子（富山市教育委員会埋蔵文化財センター学芸員）

□記念講演　「婦負の国の弥生の人びと」
講師　水野正好（奈良大学名誉教授）

史跡紹介では、千坊山遺跡等各遺跡の発掘調査の成果がスライドを交えて報告しました。今までの調査によって、この地域が古墳出現期の動向を具体的に示す事例として全国的にも稀であり、北陸における国の成立を考える上で極めて重要な地域であることと、史跡「王塚古墳」に6遺跡が追加指定され、史跡「王塚・千坊山遺跡群」として名称変更された経緯等を紹介しました。

記念講演では、奈良大学名誉教授水野正好先生が「婦負の国の弥生の人びと」と題して講演され、婦負の国に四隅突出型墳丘墓や大型前方後方墳が築造された背景を全国的な視野からアプローチされました。その中で婦負の地域では、出雲に起源をもつ四隅突出型墳丘墓が方形周溝墓から独自の形状へと派生したとし、また、婦負が越の国の中では特異な地域であり、大和の影響を強く受けた大型前方後方墳の築造を認められた地域であったと指摘されました。

そして、この遺跡群は婦負の国の集落と四隅突出型墳丘墓との関連性や古墳出現期の墳墓の変遷を追える貴重な事例であり、それらが追加指定して保存されることは大変ありがたいことで、しっかりと後世に残していってもらいたいと語られました。

講演する水野正好先生

講演会の様子

関連企画展　国指定史跡特別展「王塚・千坊山遺跡群」　　2005.4.1～2006.3.31

記念事業に併せて、婦中埋蔵文化財資料館において、関連企画展「王塚・千坊山遺跡群」展を平成17年4月1日～平成18年3月31日まで開催しました。千坊山遺跡・鍛冶町遺跡などの集落跡、六治古塚墳墓・富崎墳墓群などの四隅突出型墳丘墓、勅使塚古墳・富崎千里古墳群の古墳からの出土品を一堂に集め展示しました。期間中は大勢の来館者があり大盛況でした。

北代縄文広場この1年　－2005年度－

新富山市誕生記念「縄文土偶－新富山市の顔・顔・顔」　2005.7.15～9.25

新富山市誕生を受け、合併旧市町村内で過去に発掘調査などで出土した縄文時代の土偶約 50 点を北代縄文館に一堂に集めて展示しました。

顔を表現した土偶は市民にも親しみやすく、また土偶を通して縄文時代の生活や文化圏を広い範囲で見ることができます。

展示のようす

期間中延べ約 1,600 人もの市民や研究者の方々が縄文館を訪れ、縄文人の生活や造形、精神文化に関心を寄せていました。

社会に学ぶ 14 歳の挑戦　2005.6 月、9 月

中学生の職場体験活動「社会に学ぶ 14 歳の挑戦」で 6 月と 9 月に 7 名（女子 3 名、男子 4 名）が、広場の管理業務を体験しました。

展示替え・清掃作業のようす

土屋根住居の除草や縄文館内の展示ケース内の清掃などを一生懸命こなしていました。

また、一部の展示替えを行った中学生は、普段ケース越しにしか見ることのできない 4 千年前の出土品を直に触れ、ものを大事に扱うことの大切さを学んでいた様子でした。

新・解説ボランティアの参加　2005.10～

北代縄文広場解説ボランティアは来場者への遺跡の解説や土器づくりなどの体験学習の指導を行っています。広場がオープンして 5 年経ち、70 歳を越える方も多くなった為、解説ボランティアを募集したところ 3 名の方々が新たに加わり、総勢 15 名で活動をしていくことになりました。

新規ボランティア研修のようす

新しく加わったボランティアの方々は 6 回の研修を経て、10 月から解説などを行っています。時間があれば、北代遺跡だけでなく、研修で得た新たな知見についても触れ、さらに自らの体験談を交えて様々なお話を来館者にしていました。

北代冬まつり　2006.1.28

今年は、12 月に降った雪が広場に多く残り、これまでにない「冬まつり」らしさが感じられました。

雪の舞う中、地元長岡校下の方々を中心に約 300 名が集まり、左義長やもちつき、ビンゴ大会などで親交を深めていました。

左義長のようす

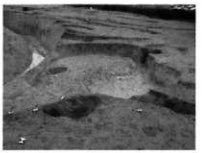
左義長は、雪が多いため例年と場所を変え、初めて復元住居群の周辺で実施しました。縄文時代に広場として利用されていたと考えられる場所で行ったことになり、4 千年前も今も地域の人々の拠り所となっています。

発掘速報

共存する2系統の古墳

百塚住吉遺跡

百塚住吉遺跡は、富山湾から約 4km 内陸に入った神通川左岸の河岸段丘上に立地します。発掘調査では、弥生時代後期(約 1,900 年前)の土器が出土した竪穴建物跡1棟と掘りの井戸1基、古墳時代前期（約 1,700 年前）の古墳2基、時期不明の方形周溝状遺構2基、畑跡などが見つかりました。



竪穴建物跡

●有力者が眠る墓地

調査では、前方後円墳と前方後方墳が並んで確認されました。いずれも上部は削平されているため、埋葬施設や副葬品の内容は不明です。棺が葬られたであろう後円部・後方部には深くて広い周溝が、前方部には浅くて狭い周溝がめぐらされ、墳丘を区画しています。土器はわずかしか出土せず、2 基の新旧関係は分かりません。

前方後円墳

前方後円墳は、墳丘裾で全長約 24mを測り、直径約 13mの後円部に長さ約 11mの狭長な前方部がのびていたと推測されます。後円部側の周溝は、幅約 2.5m、深さ最大約 1.5mを測り、前方部に向けて浅くなります。

前方後方墳は、墳丘裾で全長約 16mを測り、長軸約 12m（推定）・短軸約 10mの隅丸方形の後方部に、長さ約 6mの前方部がのびています。後方部側の周溝は、幅約 2m、深さ約 1mを測り、前方部に向けて浅くなります。また前方部の周溝は途中で途切れ、左右対称にはなりません。後方部北側の溝の底部には壺一個体がつぶれた状態で出土しました。

前方後方墳

●古墳は何を意味するか

今回調査した2基の古墳から、これまで知られていなかった呉羽山丘陵北東地域の有力者の存在が浮かび上がってきました。

この一帯は、東には大型前方後方墳がある婦負地域へと遡上する神通川を見下ろし、周辺には近畿地方に通じる幹線道路の古代北陸道の存在が想定されるなど、水路・陸路ともに交通の要地に位置します。畿内勢力の影響を感じさせる前方後円墳の築造には、このような地理的条件が関係しているのかもしれません。（大野英子）

中世寒江庄の中核集落か

八町Ⅱ遺跡

八町Ⅱ遺跡は、呉羽山丘陵の北西側に広がる射水平野に立地する集落跡です。本遺跡では、4つの時期に集落が営まれ、時期により立地する場所が異なります。

Ⅰ期は古墳時代前期（4世紀）で遺跡の東側、Ⅱ期は古墳時代中期（5世紀）で遺跡中央から西部、Ⅲ期は室町時代（14世紀後半～15世紀）で遺跡中央部、Ⅳ期近世（16世紀前半）で遺跡中央から東部に立地します。全体としてⅢ～Ⅳ期の集落が遺跡の主体的性格であると考えられます。

八町Ⅱ遺跡本年度調査区

平成17年度の発掘調査では、古墳時代の溝・中世の掘立柱建物・竪穴状土坑・井戸・区画溝、近世の井戸・区画溝・畠跡を確認しました。

● 古墳時代の集落

平成17年度調査区東端から幅約1m、深さ約40㎝で直径約15mの円形に巡る溝が見つかりました。溝からは古墳時代前期（高畠式、4世紀初）の土器が大量に出土しています。この溝は住居あるいは墓域を巡る周溝と考えられます。

古墳時代の溝

● 中～近世の集落

調査区西側では、中世の掘立柱建物を2棟検出しました。4間以上×2間の側柱建物と5間以上×2間の総柱建物で、柱根や柱の沈みを防ぐための礎板は出土していません。建物付近には地面を掘り込んだ竪穴状土坑が存在し、建物に付属すると考えられます。竪穴状土坑は一辺約3mの隅丸方形で、主軸方向が同一のものを4基確認しました。掘立柱建物と竪穴状土坑は区画溝の内側にほぼ平行して立地し、屋敷地を形成しています。

昨年度からの発掘調査で、本遺跡の中～近世に属する遺構は、軸方向の違

掘立柱建物と竪穴状遺構

いから 2 つのグループがあることが分かってきました。A 群は平成 16 年度調査区から継続して見られる北東⇔南西軸方向の遺構で、調査区西側の掘立柱建物・竪穴状土坑・区画溝が該当します。それらの時期は竪穴状土坑の出土遺物からⅢ期の室町時代(14～15 世紀)と考えられます。B 群は南⇔北軸方向の区画溝を中心とする遺構で、東側に多く所在しています。これらは A 群の溝・竪穴状土坑より新しく、出土遺物からⅣ期の 16 世紀前半のもの推測されます。

●中世～近世の井戸

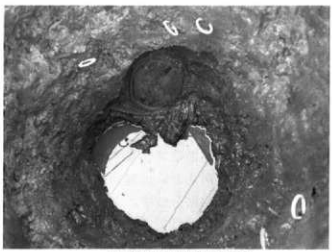
A・B 群ともにみられる井戸は本年度調査では 37 基を確認しています。

規模は直径 50 ㎝の小型のものから直径 3m の大型のものまであり、ほとんどは素掘りですが、木製の井戸枠を持つものが 1 基確認されています。

調査区中央部に位置する素掘りの小型井戸からは、曲物や加工された木製品、炭化材、火を受けた痕跡があり井戸の鍾と思われる加工のある石、最下層からは単一の植物の種子が大量に出土しました。分析の結果、この種子は栽培植物のアサで、井戸の廃絶時に意図的に入れられたものであることから、井戸祭祀に関わる遺物と考えられます。

また、竪穴状土坑付近に位置する大型の方形井戸からは、土師器片と大量の珠洲片、直径 3 ㎝の滑石製白玉が 1 点出土しています。

八町Ⅱ遺跡の井戸は密集または近接するという特徴があり、居住遺構に比べるとかなり多くの数が確認されています。水質が悪く新たに構築する必要があった、日常生活に必要な水を確保する以外にも使用していた等の理由が考えられます。



井戸からの曲物出土状況

井戸枠の残る井戸

●文献にみえる「寒江庄(さぶえのしょう)」

八町Ⅱ遺跡の周辺は眞羽町・北代地区を含め、遺跡の営まれた南北朝・室町時代には京都下鴨社の神社領「寒江庄」に該当します(『右馬頭某筆氏奉書』明徳 4 年［1393］7 月 13 日および『将軍家御教書（鴨御祖皇大神宮諸国神戸記)』同月 22 日)。

当遺跡はちょうど史料にあらわれる年代の遺構（Ⅲ期）が遺跡の主体であることから、荘園内の中核的な集落であった可能性が考えられます。

この後戦国期に寺社領は後退し荘園制は衰退するとされますが、当遺跡においては継続してⅣ期の集落が営まれます。また縄文時代・古代の遺物も出土していることから、八町Ⅱ遺跡は肥沃な土地を基盤として各時代において集落が営まれていたことが発掘調査で確認されました。

（近藤顕子・鍋谷仁美）

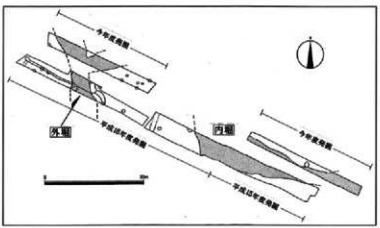
戦国時代の城館の暮らし

小出城跡

●小出城跡のあらまし

小出城跡は戦国時代～安土桃山時代の城館跡です。天正９（1581）年の小出城の戦いでは、越中をおさめた織田信長方の佐々成政と越後の上杉景勝が戦火をまじえた舞台となりました。

小出城の位置や規模などはこれまで詳しくわかっていませんでした。平成 10～13 年度、そして 15 年度から継続して行ってきた調査によって、城の位置や構造、生活の様子が次第に明らかになってきています。



平成 15～17 年度の調査区

外堀の様子

●堀の様子がさらに明らかに

昨年度までの調査で、東西方向に延びる内堀と南北方向に延びる外堀が見つかっていました。

今年度の調査では、内堀の北側の掘り込みが確認され、内堀の幅は最大 10mとなることが分かりました。幅は東に向かって狭くなるようです。深さは約 50～60cm ですが、上部は削られてしまっているため、本来はもっと深かったと思われます。内堀はもともと湿地だった場所を埋め立てて整地し、その上から掘り込まれていました。堀を掘削する前に大規模な地盤の整備工事が行われたことが推定できます。

また、外堀は従来の南北方向に延びるものに加え、それに直交して東西方向に分岐するものが確認されました。幅は約５ｍで、深さは約 50cm です。内堀と外堀の間にある郭が、今回確認したこの東西方向の堀によって区画されていたことが考えられます。

●出土品が物語る当時の暮らし

出土品には、鉄砲の弾など戦いを物語る資料がある一方、土師器、珠洲焼、瀬戸美濃焼、下駄、曲物、箸、木簡、漆椀、編籠、たも網、五輪塔、板碑、鉄製鏃先など、日常の生活に関係する資料も数多く見つかっています。一般的に城というと、戦いのための場所というイメージが強いかもしれませんが、こうした出土品からは、小出城が軍事の拠点としてだけでなく、人々の居住空間としての役割も持っていたことが分かります。

たも網の出土状況

たとえば、城内で子供が暮らしていたことを示すように子供用の下駄が出土していますし、堀の中から出土したたも網は、近くの河川から堀の中に水を引き入れて、魚を獲っていた可能性を示しています。また、五輪塔からは近くに墓があったことがわかります。堀の斜面に突き刺さった状態で出土した鉄製の鋤先は、堀の掘削に使われていたものかもしれません。このように多くの出土品から当時の暮らしぶりを窺い知ることができます。

鋤先の出土状況

●中世の井戸と祭祀

今年度の調査では5基の井戸跡が見つかっています。地面を筒状に掘っただけの素掘りの井戸、井戸枠として木板を組んだ木組み井戸（写真左）、細長い竹状の木材を側壁に沿って立て並べ、壁面を補強している井戸（同右）など、同じ井戸でも構造に違いがあります。このうち竹状の木材を壁面の補強用に使用している井戸は、出土品から他の井戸とほぼ同じ時期と考えられますが、類例があまりない珍しいものです。

これらの井戸からは、水溜めとして利用された曲物や、漆器・箸などの木製品が出土しています。当時は、井戸を埋め戻す際などに、「井鎮め」として井戸の中に陶磁器や様々な木製品を納める習慣がありました。今回の調査でも、調査区西端の井戸跡からほぼ完全な形の漆椀が2点出土しています。これらの漆椀や箸などの木製品も、井戸祭祀に伴う遺物の可能性が考えられます。

確認された井戸跡

●地震の断層跡

発掘調査で見つかるのは人間が残した生活の痕跡だけではありません。今回、西調査区の東端から、地震によってできたとみられる断層の跡が見つかりました。検出したただけで6層に分けられる土層が、上下にずれていることがはっきりと確認できます。ずれの幅は7～10cmです。平成16年度の調査でも同様の断層が確認されたほか、平成15年度の調査では、地震の液状化現象による噴砂が見つかっています。富山では1585年の天正地震、1858年の安政地震が、M6級以上の大地震であったとされています。小出城跡の調査で確認された地震の痕跡も、これらの地震によるものかもしれません。

富山大学理学部の協力を得て、現地で土層サンプルの採取を行い、現在、考古地磁気測定法という科学的な分析を行っています。これによって今回確認した断層の発生時期や規模が明らかになってくると思われます。　（野垣好史・久保浩一郎）

地震の断層跡

江戸期の土塁改修状況を確認

富山城跡（とやまじょうあと）

郷土博物館増築計画に伴い、平成17年10月～11月に実施した富山城本丸天守台の試掘確認調査で、富山城に関するさまざまな新しい発見がありました。

●天守閣不在説の裏づけ

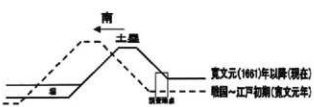
寛文元（1661）年、幕府より土塁を石垣に変えて天守台を築造する条件で、富山城天守閣の建築が許可されました。今回の発掘ではその造成盛土を確認しましたが、石垣は検出されませんでした。これまで天守閣の建築は行われなかったとの説が出されていましたが、今回の発掘はそれを裏づけるものとなりました。

●平安時代の穴を確認

また、天守台の最下層で、直径80cm、深さ45cmの平安時代の穴1基を確認しました。穴の中からは、東海地方で焼かれたと思われる灰釉陶器や須恵器が出土しました。築城（1543年頃と推定）以前の生活の跡を確認したのは今回初めてです。

●土塁基盤下から戦国～江戸時代の遺物が出土

本丸南辺の江戸時代の土塁下からは、戦国時代から江戸時代初めの生活面（土間・敷石遺構）やかわらけ、越前焼の甕・金箔を貼った木製品等などが出土しました。



このことから、江戸時代初めまで土塁は現在よりも南側に存在したと考えられます。土塁を北側の現在地へ移動した時期は、出土品の年代から、寛文元（1661）年頃（初代藩主前田利次期）と考えられます。

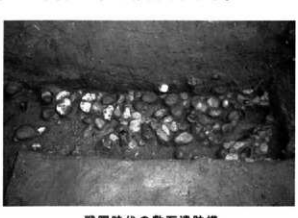
●金箔張木製品について

長さ10.7cm、幅1.5cmで、表面がカマボコ状に湾曲しています。用途は不明ですが、刀装具、建築部材、装飾調度品などの一部と考えられ、製作年代は、中世末から江戸初期（1610年頃まで）と推定されます。

金箔張木製品

●戦国時代の敷石遺構

戦国時代の層から、拳大の川原石を並べ敷き詰めた敷石遺構を検出しました。敷石は、南北約1.6m、東西約0.5mを確認し、さらに北と西側に広がります。類似した遺構は、呉羽山の白鳥城（戦国時代）でも確認されており、建物に関連する施設（基壇や通路）と考えられます。　（中本八穂）


戦国時代の敷石遺跡構

神通川左岸に営まれた集落と近世の地震の跡　　四方背戸割遺跡（よかたせどわり）

四方背戸割遺跡は、富山市北部の神通川左岸低位段丘上に位置する弥生時代後期～終末期（約1,800年前）と中世（約700年前）の集落跡です。

● 弥生時代

調査では土坑1基、周溝状の溝1条、柱穴少数、焼土跡を確認しました。遺構の数が少ないため集落の性格はよくわかりませんが、弥生時代後期～終末期の土器が多く出土しています。

この集落は神通古川とそれ以前の旧神通古川（古古川）の分岐点付近に位置し、川の氾濫により埋没したため放棄されたものと考えます。周辺には同じ弥生時代後期の集落跡の打出遺跡、今市遺跡、四方荒屋遺跡等が所在し、この神通川河口付近一帯では当時の人々が低湿地帯を生かした稲作を行うため、また川・海の幸を求めて集落を営んだことがわかります。

弥生土器出土状況

● 中世

調査では鎌倉時代（13世紀頃）の掘立柱建物跡5棟、溝3条、土坑・柱穴多数を確認しました。

建物は2棟が重複しているため、建替えが1回行われたことがわかります。遺物は珠洲焼、青磁がありますが、出土量は僅かでした。また網の重りとして使う土錘が多く出土していることから神通川や富山湾での漁が盛んに行われたことが考えられます。周辺の四方荒屋遺跡や、打出遺跡では居館跡が確認されており、港湾都市としての西岩瀬湊の繁栄ぶりがうかがえます。

中世の掘立柱建物跡

● 近世の地震跡

調査では、地震の際に地下水と混ざった砂が振動で液状化し地面に噴き出した噴砂が、中世の遺構を突き破っている様子を確認しました。遺跡一帯が神通川の氾濫原であるため砂層が厚く堆積し、地下水も豊富であることから噴砂が顕著に出現しやすいと考えられます。今回見つかった噴砂跡は、1586年の天正地震、もしくは1858年の飛越地震の二つの大地震によるものかと推定されますが、今後、科学的な測定により地震発生時期や規模について明らかにしていく予定です。　　（岩崎誉尋）

近世の噴砂跡の断面

古墳時代の粘土採掘土坑を確認

東老田Ⅰ遺跡

遺跡は富山市北西部の鍛冶川左岸扇状地にあります。厚さ15cmほどの表土直下に2間×1間の掘立柱建物1棟、溝、井戸、土坑群、ピットなどを検出しました。掘立柱建物の時期は不明（中世か）ですが、多くの遺構は出土遺物から古墳時代中期ごろとみられます。

粘土採掘土坑

土坑は径 1.4～2mほどの大形のものが数基まとまっていました。断面形はすべて袋状であり、覆土に地山の黄褐色粘土ブロックが多く含まれることから粘土を採掘した跡と考えられます。土坑の底部付近から形が復元できる土師器の壺、甕、高杯などが出土しており、周辺地では類例の少ない古墳時代中期の良好な一括資料です。

神通川左岸流域に営まれた古代の集落跡

鵜坂Ⅰ遺跡、砂子田Ⅰ遺跡

● **鵜坂Ⅰ遺跡**

遺跡は富山市中央部（旧婦中地区）の神通川左岸扇状地にあり、すぐ真横を現在も神通川が流れています。試掘確認調査により遺跡の分布範囲は3つのブロックに分かれていることが確認されており、川の氾濫等による影響があったのかもしれません。

古墳時代の溝、土坑、湧水地、平安時代の土坑、溝、畠跡(細い畝状遺構群)、中世の掘立柱建物2棟、井戸などを検出しました。

調査状況

傾向として遺跡の南部では古墳時代の遺構が多く、北西部では平安時代以降とブロックにより様相が異なります。また南東部では底面が礫混じりとなった河川の流路跡を確認しました。川による影響を受けながら、より安全な場所を求めて集落が北側へ展開したとみられます。

● **砂子田Ⅰ遺跡**

遺跡は富山市中央部(旧婦中地区)の神通川と井田川に挟まれた複合扇状地にあります。平安時代の竪穴住居1棟、溝、土坑、ピットなどを検出しました。

隅丸方形状の竪穴住居は上部が削られて深さ 10 cmほどしか残っていませんでしたが、須恵器の杯、杯蓋、甕、土師器の椀など床面付近から遺物がまとまって出土しました。前年度に行った北側地区の発掘調査ではカマドを有する竪穴住居4棟を検出しており、「門」「嶌」「秦ヵ」などの墨書土器が出土しています。

（小林高範）

平成１７年度埋蔵文化財センター事業

１ 埋蔵文化財調査

●発掘調査 開発に先立ち、遺跡を記録保存することなどを目的とした調査です。

遺跡名(遺跡No.)	所在地	調査原因	面積(㎡)	調査結果	遺跡の種類
四方背戸割(201015)	四方荒屋	国道415号線改良工事	1,375	土坑・ピット(弥生)、掘立柱建物・土坑・溝・ピット(中世)、地震跡(近世)／弥生土器・古式土師器(弥生～古代)、珠洲・青磁・土錘(中世)	集落
水落西(201023)	米田	個人住宅建設	3	遺跡なし	散布地
小出城跡(201055)	水橋小出	県道下砂子坂池田町線道路改良工事	260	堀(戦国～安土桃山)、井戸・土坑(中世)／土師器・須恵器(古代)、土師器・越前・珠洲・瀬戸美濃・青磁・漆椀・井戸枠・曲物・下駄・折敷・鉛玉・箸・編物・たも枠・五輪塔・板碑・鋤先・桃核・骨片(中世)、越中瀬戸・唐津・陶磁器(近世)、不明木製品、不明木簡、不明石臼	城館
西二俣(201067)	西二俣	個人住宅建設及び地盤改良	95.2	土坑(中世)、溝(中～近世)／弥生土器、須恵器(古代)、土師器・珠洲(中世)、越中瀬戸(江戸)、陶磁器(近世)、不明漆器、不明種子	集落
東老田Ⅰ(201072)	東老田	店舗(ｺﾝﾋﾞﾆ)建設	478	掘立柱建物・土坑・溝(古墳)／土師器・須恵器(古墳)、珠洲(中世)	集落
八町Ⅱ(201109)	八町南	県営農免農道整備事業	2,500	溝・掘立柱建物・井戸・土坑・穴・畑跡(中世)／縄文土器・石鏃・打製石斧・磨製石斧・敲石・磨石・ｽﾀﾚｲﾊﾞｰ?(縄文後～晩)、高杯(古墳前・中)、ﾐﾆﾁｭｱ土器(古墳前)、須恵器(古代)、土師器(鎌倉～室町)、珠洲・青磁(室町)、青白磁・八尾・瀬戸美濃・曲物・井戸部材・井戸の錘?・土錘・駒・鉄滓・砥石・火打石・碧玉・ｶﾞﾗｽ玉・滑石製白玉(中世)、越中瀬戸・唐津・越前?(江戸)	集落
百塚住吉(201187)	宮尾	主要地方道富山八尾線道路改良工事	800	竪穴建物跡・平地建物跡・井戸(弥生後)、前方後円墳・前方後方墳(古墳前)、不明柱穴、不明畝溝／縄文土器(縄文晩)、弥生土器(弥生後)、土師器(古墳前)	集落・古墳
小西北(201211)	小中	託児施設等建設	450	溝・土坑・ピット(中世)／土師器・珠洲・木製品(中世)	集落・城館
砂川カタダ(201284)	東老田	個人住宅建設	94	溝(古代)／弥生土器、土師器・須恵器・鉄滓(古代)、珠洲(中世)	集落
黒崎種田(201480)	黒崎	工場増築工事	105	竪穴住居・溝・自然流路(平安)、溝(中世)／土師器・須恵器(平安)、漆器(中世)、陶器(近世)	集落
砂子田Ⅰ(362122)	婦中町砂子田	民間宅地造成	398	竪穴住居・溝・土坑・穴(平安)／土師器・須恵器(平安)	集落
鵜坂Ⅰ(362132)	婦中町鵜坂	民間宅地造成	4,486.39	流路(古墳)、畑跡(平安)、掘立柱建物・井戸・土坑(中世)／土師器(古墳前)、土師器・須恵器(古墳後)、土師器・須恵器(平安)、土師器・白磁(中世)	集落・田畑
富崎(362050)	婦中町富崎	個人住宅建設	154	掘立柱建物・穴・土坑・溝(中世)／須恵器・土師器(古代)、珠洲(中世)、越中瀬戸(江戸)	集落
計13件			11,198.59		
16年度					
黒崎種田(201480)	黒崎	駐車場造成	670	竪穴状土坑・掘立柱建物・区画溝・土坑・井戸(中世)／土師器(古墳前)、土師器・珠洲・古瀬戸・青磁・白磁・越前・鉄製品・鉄滓・砥石(中世)、越中瀬戸・唐津(江戸)	集落
境野新南Ⅲ(201600)	境野新	個人住宅建設	300	ピット(縄文)、溝・焼壁土坑・土坑・ピット(古代)／縄文土器・石匙・剥片(縄文)、土師器・須恵器(古代)	集落

●試掘確認調査 開発予定地内の遺跡の有無などを確認する調査です。＊は立会調査

遺跡名(遺跡No.)	所在地	調査原因	対象面積(㎡)	調査結果
呉羽野田(201006)＊	呉羽野田	市道野田2号線道路改良工事	24	遺跡なし
打出(201009)	打出	打出放流渠工事	569	土坑(弥生)、溝、穴／弥生土器、須恵器(古代)、土師器・珠洲(中世)、越中瀬戸・陶磁器(近世)
打出(201009)＊	打出	打出放流渠工事	271	土坑・溝(中世)、土坑・溝(近世)、河川跡(近世～近代)、不明土坑、不明ピット／縄文土器、磨製石斧(縄文)、弥生土器、土師器・須恵器(古代)、土師器・珠洲(中世)、越中瀬戸・陶磁器(近世)、不明土錘、不明砥石
打出(201009)	打出	打出放流渠工事	11	土坑(古代)／土師器・須恵器(古代)

遺跡名(遺跡No.)	所在地	調査原因	対象面積(㎡)	調査結果
打出(201009)＊	布目	市道倉垣小学校線側溝取替工事	20	遺跡なし
今市(201010)	布目	個人住宅建設	330	土師器・珠洲(中世)
今市(201010)＊	寺島	市道寺島9号線道路改良工事	83	弥生土器、伊万里(江戸)
今市(201010)＊	布目	市道布目19号線道路改良工事	56	遺跡なし
今市(201010)＊	布目	布目東排水路改良工事	99	陶磁器(近世)、陶磁器(近現代)
四方西野割(201011)	四方荒屋	土地売買に先立つ事前調査	1,263.7	溝・土坑・ピット(近世)／土師器(古墳)、越中瀬戸・伊万里・土人形(近世)
四方西野割(201011)＊	四方野割町	布目東排水路外改良工事	41	遺跡なし
水落西(201023)	米田	個人住宅建設	925	土師器(中世)
日方江城跡(201026)	日方江	携帯用簡易アンテナ設置工事	9	溝(奈良)／弥生土器(弥生後)、土師器・須恵器(奈良)、土錘
浜黒崎飯田(201032)＊	浜黒崎	市道浜黒崎10号線道路改良工事	100	遺跡なし
横越(201035)	野田	工場建設	2,053	不明溝／縄文土器、土師器(古代)、珠洲(中世)、不明土錘
水橋大正(201054)	水橋大正	店舗建て替え	2,383.06	陶磁器(近世)
呉羽本郷(201062)＊	本郷中部	市道呉羽本郷17号線舗装新設工事	90	穴・溝・土坑・井戸(中世)／土師器・珠洲・漆器皿・曲物(中世)、陶器(近世)、不明木製品
願海寺城跡(201066)	願海寺	事務所・倉庫・資材置場及び自己住宅建設	2,188.56	溝・土坑(中世)／土師器・珠洲・越前・瀬戸美濃(中世)、越中瀬戸・伊万里・陶磁器(近世)
願海寺城跡(201066)	野々上	個人住宅建設	328	伊万里・唐津(近世)、近代磁器
願海寺城跡(201066)	願海寺	市道野町願海寺線道路改良工事	200	不明溝
願海寺城跡(201066)＊	願海寺	浄化槽埋設	7.35	不明溝
西二俣(201067)	西二俣	個人住宅建設	483.81	溝／土師器(古代)、土師器・瀬戸美濃(中世)、伊万里(江戸)、陶磁器(近世)
東老田Ⅲ(201071)＊	中老田	市道中老田10号線道路改良工事	87	磨製石斧(縄文)、越中瀬戸(江戸)
東老田Ⅰ(201072)	東老田	店舗(コンビニ)建設	999	溝・土坑・ピット(古墳)／土師器(古墳中)、珠洲(中世)、土錘
東老田Ⅰ(201072)	東老田	資材置場造成	631	溝・土坑・ピット(古墳)／土師器(古墳中)、珠洲(中世)
中老田Ⅲ(201077)	中老田	農道整備工事	1,027	越中瀬戸(江戸)、不明木製品
極楽寺廃寺(201106)	北代	防火水槽設置に先立つ事前調査	40	土師器(古代)、陶磁器(近世)
八ヶ山A(201110)	八町南	資材置場造成	6,672	溝・土坑・ピット(中世)／縄文土器・打製石斧(縄文)、土師器・珠洲・瀬戸美濃(中世)、碇器(近世)
北代加茂下Ⅲ(201120)	北代	携帯電話用無線基地局建設	10	縄文土器、近世磁器
北代(201125)＊	北代	私道アスファルト舗装工事	240	遺跡なし
茱屋町(201162)＊	茱屋町	都市緑化植物園整備	1,125	遺跡なし
百塚住吉B(201185)	宮尾	墓地整備	143.68	土坑(弥生)／弥生土器、須恵器(古代)
百塚住吉B(201185)＊	宮尾	墓地整備	24	弥生土器
飯野新屋(201203)＊	新屋	市道米田新屋線道路改良工事	56	不明溝／弥生土器、須恵器(古代)、土師器(中世)
新屋殿田(201204)＊	新屋	かんがい排水路改修工事	133	遺跡なし
針原中町Ⅱ(201215)	針原中町	墓地造成	1,052	溝・土坑・穴(不明)／縄文土器(縄文晩)、かわらけ・珠洲(中世)、越中瀬戸(近世)
宮成(201216)＊	宮成	市道宮成針原新町線道路改良工事	36	施釉陶器・施釉磁器(江戸)
中野(201220)＊	水橋的場	市道水橋的場金尾新線道路改良工事	45	溝(弥生後・鉢)、土坑(弥生鉢)／弥生土器(弥生後・鉢)、瀬戸美濃(中世)、伊万里・越中瀬戸(江戸)
水橋金広・中馬場(201251)＊	水橋中馬場	市道水橋金広中馬場線道路改良工事	20	遺跡なし
水橋金広・中馬場(201251)＊	水橋北馬場	市道立山水橋線道路拡幅工事	570	遺跡なし
水橋上砂子坂(201256)	水橋下砂子坂	公民館建設	600	伊万里(江戸)
西金屋・西金屋窯跡(201293)	古沢	駐車場・資材置場造成	218	土坑・土器集中地点(平安)／土師器・須恵器・土錘・鉄滓(平安)
古沢3号窯跡(201294)	古沢	農業用ため池整備	3,100	須恵器黒沢原(奈良)／須恵器(奈良)

遺跡名(遺跡No.)	所在地	調査原因	対象面積(㎡)	調査結果
金草電化農場前(201333)	住吉	個人住宅建設及び農作業所建築	330.58	焼壁土坑(古代)／土師器・須恵器(古代)
富山城跡(201397)	本丸	城址公園整備計画	35	土間遺構・土坑・整地跡・堀跡・小鍛冶跡(中世)、土間遺構・土坑・整地跡(江戸)／弥生土器、土師器・須恵器(古代)、かわらけ・珠洲・瀬戸美濃・鐙冶滓・羽口・鍛造剥片・鉄器「釘・工具」・透彫銅合金鋳物製品・土師(中世)、伊万里・唐津・越中瀬戸(江戸)
富山城跡(201397)	本丸	郷土博物館増築棟等建設計画	2,800	土坑(平安)、敷石・土間・土坑(戦国)、土坑・土墨・盛土(近世)／灰釉陶器・須恵器(平安)、かわらけ・珠洲・越前(戦国)、かわらけ・伊万里・唐津・越中瀬戸・金箔張木製品・木製品・瓦(江戸)
富山城跡(201397)	総曲輪	総曲輪通り南地区第一種市街地再開発	7,250	大溝、井戸、土坑／弥生土器、土師器・瀬戸美濃・珠洲(中世)、越中瀬戸・伊万里・唐津(江戸)
池多南(201415)＊	池多	県営畑地帯総合整備事業(呉羽山ろく地区)畑地整備工事	10	遺跡なし
開ヶ丘西(201444)＊	開ヶ丘	県営畑地帯(呉羽山ろく地区)7ﾌﾞﾛｯｸ畑地灌漑施設ﾊﾟｲﾌﾟﾗｲﾝ敷設	58	遺跡なし
開ヶ丘ﾔﾝｷﾀﾞ(201445)＊	開ヶ丘	県営畑地帯総合整備事業(呉羽山ろく地区)畑地整備工事	21	遺跡なし
御坊山(201460)＊	池多	県営畑地帯総合整備事業(呉羽山ろく地区)畑地整備工事	234	焼壁土坑、ピット、土坑／縄文土器、須恵器(古代)、ふいご羽口、鉄滓
黒崎種田(201480)	黒崎	工場増築工事	640	土師器・須恵器(平安)、土師器(中世)
黒崎種田(201480)＊	黒崎	工場増築工事	21	遺跡なし
黒崎種田(201480)	黒崎	駐車場造成	668.75	土師器・珠洲(中世)、陶磁器(近世)
黒崎種田(201480)	黒崎	アパート建築	905	土師器・須恵器(平安)
八日町(201481)＊	八日町	八日町排水路改良工事	32	遺跡なし
山室東田(201487)	太田	個人住宅建設	198.75	土師器(中世)
山室東田(201487)	太田	個人住宅建設	199.55	溝(古代)／土師器・須恵器(古代)
太田中田Ⅰ(201491)	太田	共同住宅建設	1,207.11	土師器(中世)
吉岡(201525)＊	吉岡	店舗兼住宅建設工事	6	遺跡なし
吉岡(201525)＊	吉岡	吉岡排水路改良工事	22	遺跡なし
森田・森田瑞泉寺跡(201530)＊	森田	土川の護岸復旧工事	386.4	遺跡なし
辰尾(201531)＊	辰尾	市道宮保辰尾1号線道路改良工事	58	遺跡なし
辰尾(201531)＊	上熊野	市道安養寺上熊野線道路改良工事	36	遺跡なし
布市北(201532)＊	布市	市道布市15号線道路改良工事	40	遺跡なし
布市(201537)＊	月岡町6丁目	市道上栄線道路改良工事	46	不明土師器
布市(201537)＊	石田	市道石田8号線道路改良工事	20	遺跡なし
大井(201574)＊	上今町	市道牧田上今町線道路改良工事	115	遺跡なし
水橋入部(201579)＊	水橋二杉	市道水橋10号線道路改良工事	48	遺跡なし
直坂Ⅰ(301019)＊	舟新	排水路付替工事	200	遺跡なし
三ツ松天コ(361039)	八尾町三ツ松	仁歩ふるさと交流館建設	506	遺跡なし
友坂(362002)	婦中町友坂	公民館建設	902	土師器・須恵器(古代)、珠洲(中世)
下邑東(362042)	婦中町羽根	知的障害者通所更生施設建設	1,523.38	須恵器(古代)
下邑東(362042)＊	婦中町羽根	水道工事	357	陶磁器(近世)、陶磁器(近代)
富崎(362050)	婦中町富崎	個人住宅建設及び作業場・車庫建築工事	661	溝、土坑／弥生土器、土師器・須恵器(古代)、珠洲(中世)、磁器(近世)
栗尾Ⅰ・南部Ⅰ(361065・362129)＊	婦中町熊野道	水道工事	770	弥生土器(弥生終)、土師器・須恵器(平安)、越中瀬戸・伊万里・陶磁器(江戸)
計112件(＊38)			114,274.63	
16年度				
水落西(201023)	米田	農家分家住宅建設	416	溝(中世)／珠洲(中世)、不明木製品
高木中坪(201096)	高木	県営農免農道整備事業(呉羽和合地区)農道工事	980	磁器(近世)、不明木製品

2　北代縄文広場管理

北代縄文広場を市民に公開し、活用するため、管理運営を長岡校下自治振興会に委託しています。今年度も縄文広場ではさまざまな行事が行われました。（p4参照）

3　「史跡　安田城跡」管理

「史跡　安田城跡」を市民に公開し、活用するため、管理運営を（財）富山市婦中公園緑地管理公社・（財）富山市シルバー人材センターに委託しています。

富山市婦中町安田地内に所在する史跡安田城跡は、全国的にも珍しい中世の平城として昭和56年2月に国の史跡に指定されました。平成2～4年度に整備を行い、平成5年5月13日から、「史跡　安田城跡」として公開しています。

ここには、「安田城歴史の広場」「土塁展示館」「安田城跡資料館」等の施設があり、県内外からたくさんの方々が訪れており、オープン以来、平成18年3月末までの来館者数は71,836人です。

広場では、本丸・二の丸・右郭が復元されており、本丸にある土塁展示館には、剥ぎ取り保存した土塁断面を展示し、土塁構築の様子がわかります。

資料館では、出土品や城の歴史的背景の映像を見ることができ、2階には遺跡が一望できる展望室があります。

史跡活用の一環として、平成5年度より「安田城　月見の宴」が地元朝日地区の住民により催され、小学生による武者行列やよさこい、花火大会等が行われています。

史跡　安田城跡

安田城跡資料館

4　婦中埋蔵文化財資料館管理

婦中埋蔵文化財資料館を市民に公開し、活用するため、富山市埋蔵文化財センターが直接管理運営を行っています。旧婦中町の埋蔵文化財の展示・保管・整理等を行う施設として、平成16年7月3日に富山市婦中町笹倉地内に開館されました。

オープン記念として、第1回企画展「ふるさと婦中」（平成16年7月3日～平成16年10月31日）を行い、縄文時代から中世までの旧婦中町の歴史を紹介しました。

その後、王塚・千坊山遺跡群の国指定答申を記念して特別展「王塚・千坊山遺跡群」（平成16年12月1日～平成17年3月31日）を行い、引き続き国指定史跡特別展「王塚・千坊山遺跡群」を開催しました（平成17年4月1日～平成18年3月31日）。（p2～3参照）

婦中埋蔵文化財資料館

オープン以来、平成18年3月末までの来館者数は1,088人です。

5　展示・普及

(1)発掘速報展 2005

「国づくりのリーダーたち」平成 18 年 3 月 20 日（月）
～3 月 24 日（金）　富山市役所 1 階多目的ホール

百塚住吉遺跡現地説明会

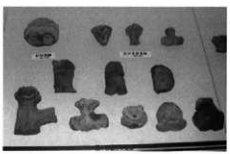
(2)遺跡現地説明会

①富山城跡　見学者１５０名
平成 17 年 11 月 23 日(水)

②百塚住吉遺跡　見学者１００名
平成 17 年 12 月 3 日(土)

③八町Ⅱ遺跡　見学者８０名
平成 17 年 12 月 3 日（土）

(3)展示



北代縄文広場展示

①奥田小学校ふるさと考古教材展示室
第 12 回展示「古代人の道具～ものづくりの道具～」展　平成 17 年 5 月 23 日～平成 17 年 10 月 31 日
第 13 回展示「古代人の道具～いのりの道具～」展　平成 17 年 11 月 14 日～平成 18 年 3 月 31 日

②北代縄文広場富山市内遺跡発掘速報コーナー展示
北代縄文館夏季企画展　「縄文土偶～新富山市の顔・顔・顔」平成 17 年 7 月 15 日～平成 17 年 9 月 25 日

ⅰ　「富山市の縄文遺跡発掘速報展～池多南遺跡と水橋荒町・辻ヶ堂遺跡～」平成 17 年 4 月 26 日～7 月 13 日

ⅱ　「大沢野地域の縄文遺跡(1)～布尻遺跡・布尻 B 遺跡～」平成 17 年 9 月 27 日～12 月 27 日

ⅲ　「婦中地域の縄文遺跡(1)～鏡坂Ⅰ遺跡～」平成 18 年 1 月 6 日～3 月 31 日

③婦中埋蔵文化財資料館
「王塚・千坊山遺跡群」平成 17 年 4 月 1 日～平成 18 年 3 月 1 日

④その他

ⅰ　上条公民館文化展
小出城跡出土品 1 点　平成 17 年 11 月 3 日

ⅱ　第 13 回三郷古美術鑑賞会展示　水橋二杉遺跡出土品 13 点　平成 17 年 5 月 29 日

上条公民館展示

(4)資料貸出

富山県埋蔵文化財センター　企画展「発掘された富山」
貸出資料　長岡八町遺跡出土品 4 点、栃谷南遺跡出土品 13 点、水橋金広・中馬場遺跡出土品 3 点、富山城・城下町遺跡出土品 6 点、史跡北代遺跡写真等 2 点
会期　平成 17 年 10 月 4 日～平成 17 年 11 月 30 日

大阪府立弥生文化博物館　企画展
貸出資料　杉谷 A 遺跡出土品 4 点、稗田遺跡出土品 1 点、南砺市下梨地区出土翡翠大珠 1 点
会期　平成 17 年 10 月 4 日～12 月 4 日

(5)講演・研究発表

藤田富士夫　上市町教育員会剣いきがい大学「『古事記』の中の縄文土偶」平成 17 年 6 月 28 日　上市生涯学習会館

藤田富士夫 富山市日本海文化研究所フォーラム「海・渦・川をめぐる日本海文化」(パネラー) 平成17年9月10日　水橋ふるさと会館

藤田富士夫 富山県埋蔵文化財センター企画展「発掘された富山」記念講演「富山の発掘八十年」平成17年10月17日　富山県埋蔵文化財センター

藤田富士夫 (財)伝統文化活性化国民協会「平成17年度伝統文化活性化シンポジウム伝統文化の東西南北」(パネラー) 平成17年10月29日　有楽町朝日ホール

郷土文化講座講演

藤田富士夫 国父記念館古玉与玉文化研究課程古玉研習班「日本列島の玦飾文化の起源と展開」・「日本列島における翡翠文化論」平成17年12月19～20日　台湾国父記念館

古川知明 第212回郷土文化講座「富山城の歴史－発掘と石垣調査の成果－」平成17年6月16日　県立図書館多目的ホール

古川知明 越中史壇会特別研究発表会「中世富山城研究の現状と課題」平成17年7月9日　県民会館

古川知明 第22回全国和船研究会「中世岩瀬湊調査研究グループ研究成果報告」平成17年9月2日　高岡市万葉歴史館

堀沢祐一 吹上遺跡シンポジウム「富山市北代縄文広場の運営と活用」平成17年10月16日 上越市立大和小学校

小黒智久 ふくおか歴史文化フォーラム「ふくおかの飛鳥時代を考える」事例報告・パネリスト　平成17年10月9日　富山県福岡町総合町民センター(Uホール)

「ふくおかの飛鳥時代を考える」フォーラム

小黒智久 富山市日本海文化研究所公開講座「飛騨の古墳と日本海」　平成18年2月21日富山市科学文化センター

小黒智久 シンポジウム「北陸の古墳編年の再検討」　平成18年3月4日 富山大学

野垣好史 ふくおか歴史文化フォーラム「ふくおかの飛鳥時代を考える」パネリスト　平成17年10月9日　富山県福岡町総合町民センター(Uホール)

(6)講座

①富山市民大学

ⅰ）**市民の考古学「とやま住まいの考古学」**(於：富山市民学習センター)

回	月　日	講　座　題　目	講　師
1	4／26	火と住まい（囲炉裏や炉の変遷）	古川専門学芸員
2	5／17	住まいにみる生活の工夫（床・壁・窓・入口）	古川専門学芸員
3	6／7	土屋根住居（その構造と特色）	堀沢学芸員
4	6／21	掘立柱建物と竪穴住居	堀沢学芸員
5	7／5	焼失住居を復元する（打出、開ケ丘の住居から）	小黒学芸員
6	9／6	集落の構造（縄文集落はなぜ円環か）	近藤学芸員
7	10／4	巨木建物と日本海文化	近藤学芸員
8	10／18	現地学習（呉羽山丘陵周辺の住まいをめぐる）	堀沢学芸員
9	11／1	山から里へ（竪穴住居から高床建物へ）	小林主査学芸員
10	11／15	住居構造にみるまつり	古川専門学芸員

ⅱ）**日本の歴史**　(於：富山市民学習センター)

第1回　5月11日 縄文時代の始まり（日本人はどこから来たか）　藤田所長

第2回　5月26日 弥生時代に稲あり（森本六爾と考古学）　藤田所長

第５回　７月 13 日 武士について（1）　加藤所長代理
第６回　９月 14 日 武士について（2）　加藤所長代理

②市役所出前講座

- 平成 17 年８月５日富山市測量設計業センター「遺跡から見た富山の歴史－富山城の歴史と石垣構築」古川専門学芸員（於　スクエア中野）25 名
- 平成 17 年 11 月 18 日古里地区老人クラブ「遺跡からみた富山の歴史（王塚・千坊山遺跡群について」大野学芸員（於　古里地区公民館）60 名
- 平成 17 年 12 月９日上条公民館連絡協議会「遺跡からみた富山の歴史（小出城跡の発掘調査の成果）」野垣学芸員（於上条公民館）13 名

(7)その他

①社会に学ぶ 14 歳の挑戦

・出土品整理・遺跡発掘調査業務の体験
新庄中学校（参加者２名）
平成 17 年９月 26 日(月)～９月 30 日(金)
奥田中学校（参加者２名）
平成 17 年 10 月３日(月)～10 月７日(金)

・北代縄文広場管理業務の体験
呉羽中学校（参加者３名）
平成 17 年６月 13 日(月)～６月 17 日(金)

14 歳の挑戦　作業風景

②宮野小学校社会科学習「校外学習」大野学芸員

宮野小学校（47 名）平成 17 年５月 31 日
於：王塚古墳・勅使塚古墳・婦中埋蔵文化財資料館

③長岡小学校学年親子活動「勾玉作り」　大野学芸員・堀内学芸員

長岡小学校３学年親子（80 名）　平成 17 年６月 18 日　於：長岡小学校

④古沢小学校総合学習「杉谷古墳群について」　大野学芸員

古沢小学校６学年親子（50 名）　平成 17 年７月６日　於：古沢小学校

⑤新聞記事掲載

2005,4,24　「中世の八町に権力者？」（北日本）
2005,5,3　「遺跡 960ヶ所ここです・CD－ROM 版遺跡地図作成」（北日本）
2005,5,17　「新市発展願い土偶展」（北日本）
2005,6,22　「北陸初の人面付き土器・直坂遺跡（大沢野）で出土と判明」（北日本）
2005,7,7　「杉谷古墳群理解できた・古沢小で学習会」（北日本）
2005,7,10　「富山城の発掘成果紹介（古川知明）」（北日本）
2005,8,3　「宗派ごとに墓地区分け？・長岡御廟築造に新説（古川知明）」（北日本）
2005,8,17　「手作り勾玉できた・北代縄文館」（富山）
2005,8,30　「海底に眠る「岩瀬湊」か・人工の大石群発見」（富山）
2005,8,31　「見直し進む日本海文化・高岡で全国和船研究会（古川知明）」（北日本）
2005,9,3　「高岡で和船研究会」（各紙）
2005,9,9　「模型・写真で特徴紹介・王塚千坊山遺跡群」（北日本）
2005,9,11　「日本海文化多角的に・海潟川フォーラム」（各紙）
2005,9,18　「帰負の国～弥生ものがたり・遺跡探訪と特別講演会」（各紙）
2005,10,6　「富山城の石垣　解体修理」（富山）
2005,10,5　「県内考古学の 80 年語る・『発掘された富山』展（藤田富士夫）」（北日本）
2005,10,25　「縄文土器ペーパークラフト・北代縄文広場ホームページ」（北日本）
2005,11,2　「富山城跡試掘確認調査現地説明会」（各紙）
2005,12,4　「百塚住吉遺跡・八町Ⅱ遺跡発掘調査現地説明会」（各紙）
2005,12,19　「'05 回顧　考古学」鹿島昌也（北日本）
2006,1,16　「呉羽丘陵に２つの勢力？」（北日本）
2005,4～2006,3　「高志の国」　藤田富士夫（読売）
2005,7～2006,3　「富山城変幻・考古学から検証する」①～⑳　古川知明（富山）

6　遺跡地図管理

合併による埋蔵文化財包蔵地総数は 964 箇所、遺跡面積は 41,510,000 ㎡です。

これらの埋蔵文化財包蔵地は平成 17 年 4 月 1 日発行の『富山市遺跡地図　埋蔵文化財包蔵地所在地図（改訂版）1.旧富山市域』と『富山市遺跡地図　埋蔵文化財包蔵地所在地図（改訂版）2.旧大沢野町・大山町・八尾町・婦中町・山田村・細入村域』に登載した。

遺跡地図は本センターのほか市開発部局や市立図書館、教育行政センターで閲覧できます。

7　研究

(1)小研究会　（会場：埋蔵文化財センター会議室）

平成 17 年 6 月 29 日　小林高範主査学芸員「平成 16 年度奈良文化財研究所研修『遺物観察・構造調査過程』について」
近藤顕子学芸員　「富山県埋蔵文化財発掘調査積算基準（H17.4.1 施行）について」

平成 17 年 7 月 20 日　坂森主査学芸員・浦畑嘱託学芸員「富山城文献研究最前線～富山城下町の様相と新規購入絵図から得られる新知見について～」

平成 17 年 10 月 3 日　麻柄一志氏（魚津市立図書館長・魚津市史編纂室長）「焼失住居について」

平成 17 年 10 月 20 日　徐子峰氏（赤峰学院歴史系教授）「紅山文化の積石塚をめぐる諸問題」

小研究会

平成 17 年 11 月 16 日　関清氏（財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所副所長）「製鉄・鋳造遺跡の調査方法」

平成 18 年 3 月 22 日　黒崎直氏（富山大学人文学部教授）「「埋蔵文化行政」の現在・過去・未来」

(2)論文・報告・紹介　（2005 年 4 月～2006 年 3 月）*富山市内の遺跡に関連するものも含みます。

藤田富士夫　2005,5　「中国・江南の玦飾に関する一考察」『研究所報』No.3　敬和学園大学人文社会科学研究所

藤田富士夫　2005,5　「底流思想となった『月の世界観』」『社交』第 196 号　富山社交倶楽部

藤田富士夫　2005,6　「縄文晩期の円形大型木柱遺構の企画に関する若干の検討」『大境』第 25 号　富山考古学会

藤田富士夫　2005,9　「関于日本列島玦飾装飾品起源的探討」『中国玉文化玉学論叢』紫禁城出版社

藤田富士夫・奥野美和　2005,9　「上市の先史・上市町の古代」『新上市町誌』　上市町

藤田富士夫　2005,12　「地域間の交流・大陸との交流」『ドイツ展記念解説 日本の考古学〔上巻〕』学生社

古川知明　2005,4　「発掘から解明する富山城―富山城石垣が語るもの」『商工とやま』No.559

古川知明　2005,5　「発掘から解明する富山城―富山城の時鐘」『商工とやま』No.560

古川知明・千葉元・島木隆昭・古山彰一・奥村榮・経沢信弘　2005,6　「四方神中世岩瀬湊の遺跡探査―実習船（わかしお 3 号）による海底探査」『富山商船高等専門学校紀要』第 38 号　富山商船高等専門学校 9―16

古川知明　2005,7　「最近の講演会より－中世富山城も城址公園にあった　石垣築造に金沢の穴太衆が関与」『実業之富山』7 月号

古川知明　2005,7　「神通川底出土遺物のこと」『草島校下の歴史』第 50 号　草島校下郷土史会　1―10

古川知明　2005,9　「富山城時鐘について」『富山史壇』第 147 号　越中史壇会

古川知明　2005,9　「中近世富山城研究の現状と課題」『富山史壇』第 147 号 越中史壇会

古川知明　2005,9　「中世岩瀬湊を探る－海底構造物賦物の探査から」第 22 回全国和船研究会発表資料

古川知明　2005,9　「縄文中期タカラガイ型土製品について」『日本海文化研究所所報 35 号』富山市日本海文化研究所

古川知明　2006,3　「富山城の歴史－発掘と石垣調査の成果」『郷土の文化』第 31 輯 富山県郷土史会

古川知明　2006,3　「小佐波御前山周辺の修験寺院について」『富山市考古資料館紀要 第 25 号』富山市考古資料館

古川知明　2006,3　「近世富山城の縄張りについて」『富山史壇』第 149 号越中史壇会

堀沢祐一　2005,9　「とやま縄文人のすがた」『富山写真語　万華鏡 165 号　北代－縄文の顔』　ふるさと開発研究所

堀沢祐一　2005,11　「富山市北代縄文広場　復元建物の維持と活用」『日本遺跡学会誌 第 2 号　遺跡学研究』　日本遺跡学会

鹿島昌也　2005,11　「遺跡からみた中～近世の川魚漁」『日本海文化研究所公開講座 平成 16 年度記録集　海・潟・川をめぐる日本海文化Ⅱ』富山市日本海文化研究所

小黒智久　2005,6　「日本の遺跡・世界の遺跡　富山県打出遺跡」『考古学研究』第 52 巻第 1 号

小黒智久　2005,6　「古墳時代後期の越中における地域勢力の動向」『大境』第 25 号 富山考古学会

小黒智久　2005,10　「呉羽山丘陵の横穴墓群」「番神山横穴墓群」「『ふくおか歴史文化フォーラム　ふくおかの飛鳥時代を考える　資料集』福岡町教育委員会・富山考古学会

小黒智久　2005,10　「越中における古墳編年」「『シンポジウム　北陸の古墳編年の再検討』富山大学人文学部

小黒智久・野垣好史　2006,3　「富山市番神山横穴墓群出土遺物について」『富山市考古資料館紀要』第 25 号　富山市考古資料館

野垣好史　2005,10　「金屋陣の穴横穴墓群」「富山県の頭椎大刀」「『ふくおか歴史文化フォーラム　ふくおかの飛鳥時代を考える　資料集』福岡町教育委員会・富山考古学会

川崎晃　2005,3　「講師僧恵行について（補論）」高岡市万葉歴史館紀要　第 15 号

植田文雄　2005,5　「立柱祭祀の史的研究―立柱遺構と神樹信仰の淵源をさぐる」『日本考古学』第 19 号

伊藤雅文　2005,5　「2004 年の考古学会の動向 古墳時代（北陸）」『月刊考古学ジャーナル』530　ニューサイエンス社

寺崎裕助　2005,5　「新潟県の串田新式土器・古串田新式土器」『新潟考古学談話会会報』29 号

藤田慎一　2005,5　「富山県内における弥生遺跡の立地」『中部弥生時代研究会第 10 回例会発表要旨集』

吉本洋子・渡辺　誠　2005,5　「人面・土偶装飾付深鉢形土器の基礎的研究（追補 2）」『日本考古学』第 19 号

森　隆　2005,6　「富山県の中世土器（資料編 2）－道場Ⅰ遺跡出土資料の検討と中名遺跡群出土資料の総括」『富山考古学研究　紀要第 8 号』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

青山晃　2005,6　「神通川左岸における中世集落の一様相－富山市婦中町熊野地域における中世集落遺跡の動態」『富山考古学研究　紀要第 8 号』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

武田健次郎　2005,6　「建物グループと墨書土器の出土傾向」『富山考古学研究　紀要第 8 号』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

中村亮仁　2005,6　「近世の屋敷地における古植生(1)」『富山考古学研究　紀要第 8 号』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

内田亜紀子・金三津英則・栗山雅夫・境洋子・塩田明弘・高橋浩二・野垣好史・野原大輔・廣瀬直樹・古川知明　2005,6　「富山の考古学動向　Ⅰ平成 13 年 4 月～平成 14 年 3 月」『大境』第 25 号富山考古学会

内田亜紀子・小黒智久・金三津英則・栗山雅夫・境洋子・塩田明弘・高橋浩二・野垣好史・野原大輔・廣瀬直樹　2005,6　「富山の考古学動向　Ⅱ平成 14 年 4 月～平成 15 年 3 月」『大境』第 25 号富山考古学会

岡田一広　2005,8　「富山平野における弥生墓制」『季刊　考古学』92 号

高橋浩二　2005,8　「北陸の弥生墳墓から古墳へ」『季刊　考古学』92号
高梨清志、越前慶祐、栗山雅夫　2005,9　「富山県の動向」『中世史・考古学情報』第4号　伊勢中世史研究会
布尾幸恵　2005,9　「越境交流・物流」『中世都市研究』11　新人物往来社
斎藤善夫　2005,9　「市町村合併と指定文化財について」『富山史壇』第147号 越中史壇会長と某宗句の書状を中心として」『富山史壇』第148号越中史壇会
齋藤努　2006,3　「杉谷A遺跡出土銅鐃の銅同位体比測定結果」『富山市考古資料館紀要』第25号 富山市考古資料館
徐子峰　2005,10「中国・西洋における先史時代『女神』の比較研究　『富山市日本海文化研究所　紀要第19号』富山市日本海文化研究所
福江充　2005,10「芦峅寺日光坊のおんば堂別当及び布橋大灌頂法会開催に関わる勧進活動－日光坊所蔵の立山御おんば尊別当奉加勧進記（弘化3年）を中心に－」
佐伯哲也　2005,12　「天正12・13年における佐々成政の動向について－新紹介の村上義長と某宗句の書状を中心として」『富山史壇』第148号 越中史壇会
佐伯哲也　2006,3　「家老屋敷城跡遺跡再考」『富山市考古資料館紀要　第25号』富山市考古資料館
文藝春秋　2005,7　「42　北代遺跡」『日本全国 見物できる古代遺跡100』文春新書451
老田郷土史　2005,7,20　老田郷土史編纂委員会
北陸の玉と鉄（弥生王権の光と影）　17年秋季特別展『大阪府立弥生文化博物館』

8　発掘調査報告書等(2005年度)

1 富山市小西北遺跡発掘調査報告書　(2005)
2 富山市黒崎稲田遺跡発掘調査報告書 (2005)
3 富山市砂子田Ⅰ遺跡発掘調査報告書 (2005)
4 富山市鵜坂Ⅰ遺跡発掘調査報告書 (2005)
5 富山市金屋南遺跡発掘調査報告書Ⅲ (2006)
6-1 富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書Ⅱ (2006)
6-2 富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書Ⅱ【遺構図編】 (2006)
7 富山市打出遺跡発掘調査報告書 (2006)
8 富山城跡試掘確認調査報告書 (2006)
9 富山市米田大覚遺跡発掘調査報告書 (2006)
10 富山市内遺跡発掘調査概要Ⅰ (2006)
11 富山市四方脊戸割遺跡発掘調査報告書 (2006)
12 富山市東老田Ⅰ遺跡発掘調査報告書 (2006)
北代縄文通信　第19号　(2005)
北代縄文通信　第20号　(2005)
富山市の遺跡物語（富山市教育委員会 埋蔵文化財センター所報）№7　(2006)
富山城石垣ツアーのしおり　(2005)

9　埋蔵文化財センター組織

所　長1 ――― 所長代理1 ―― 専門学芸員1 ―┬― 主査1 ――― 主事1
（生涯学習課主幹）　　　　　　　　　　　├― 主査学芸員1
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　└― 学芸員9 ―― 嘱託4

事業費
①埋蔵文化財調査費　　２５７，５４４千円
　発掘調査5遺跡、市内試掘確認調査、市内出土品整理
②体制整備・一般管理費　　６４，５４１千円
③普及活動費　　３００千円
　発掘速報展開催
④遺跡・史跡保護管理費　　１８，７９１千円
　北代縄文広場管理、北代縄文広場復元建物修理等

富山市大山竪穴住居跡展示館

平成6年（1994）に東黒牧上野遺跡A地区の発掘調査時に発見された、縄文時代中期ごろの住居跡を切り取って展示しています。大きさは4.6×4.7mで柱穴4ヶ所と中央に石で組んだ炉を見ることができます。また、発掘調査により出土した土器や石器なども展示しています。

富山市大山竪穴住居跡展示館

【利用案内】

住所　富山市上滝572

開館時間　午前9時から午後5時

（入館は4時30分まで）

休館日　月曜日・祝日・12月28日から1月4日

入館料　無料

※ 詳しくは大山教育行政センター(電話076－483－2594)へお尋ね下さい。

富山市大山歴史民俗資料館

平成17年（2005）11月12日に新しくなって、再開館しました。展示室は第1から第3展示室まであり、第一展示室では大山地域の三賢人を紹介しており、山岳ガイドで有名な宇治長次郎と高野山金剛峰寺座主の金山穆韶そして修ヶ岳開山の播隆上人の資料、そのほか文化財の展示があります。

第2展示室には、常願寺川の治水と発電・砂防についての資料があります。治水の関係では明治時代のオランダ人技師ヨハネス＝デ＝レイケ等をとりあげています。

第3展示室には、有峰関係・亀谷銀山・長棟鉛山・恐竜関係の資料を展示しています。有峰関係の展示では、木彫りで表情豊かな有峰の狛犬8体（市指定：有形民俗文化財）があり、恐竜関係では実物の足跡化石などを見ることができます。

タッチパネルや映像資料も自由に見ることができ、楽しく学びながらゆっくりとした時間をすごすことができます。

富山市大山歴史民俗資料館

【利用案内】

住所　富山市亀谷1

開館時間　午前9時30分から午後5時（入館は4時30分まで）

休館日　月曜日（祝日の場合は翌日）・祝日の翌日・12月28日から1月4日

入館料　小・中学生50円（土日祝日は小中学生無料）　高校生以上110円

※詳しくは富山市大山歴史民俗資料館へお尋ね下さい。

（電話076-481-1415　FAX076-481-1417）　（小松博幸）

研究余話Ⅰ

直弧文の起源に関する一試考

—中国・漢代画像石の比較から—

藤田富士夫
（埋蔵文化財センター所長）

はじめに

最近、中国漢代の壁画や画像石について興味が湧いてきて、手元にある数少ない中国の関連図書をパラパラめくって見た。少しばかり玉器に関心があって、有名な馬王堆漢墓1号墓出土のT形帛画の、地下世界で絡み合う2匹の龍と環の交叉文様が印象に残った。そのうち中国・江蘇徐州地域の漢代墳墓から出土した画像石にも、同様に2匹の竜が環形の円形文と交叉する図文のあるのを目にした。図文を見ているうちに、そこに日本の「直弧文」のイメージが重なってきた。

直弧文と呼ばれているそれは、かかる中国漢代の「龍」と「環」の文様を投影したものではないだろうかと直感した。直弧文の研究史は長いので、その系譜の検討の中で誰かがすでに適否を考察しているに違いないと思って2～3の概説書をひも解いたが、管見では「龍」や「環」との関連を指摘したものはなかった。

このようなことから、ここに一試考を呈することとした。

画像石の「龍」と「環」文様

まず、筆者の管見にある画像石について紹介したい。

中国・江蘇徐州地域の漢代墳墓から出土した画像石に、2匹の龍が壁形の円形文をくぐり抜ける図文がある。江蘇省文物管理委員で保管する以下の3例が目にとまった(江蘇省 1959年)。(1)徐州・韓楼地区の画像石(第1図1)、「上刻交龍穿環紋」長さ 2.16m、高さ 0.58m である。(2)徐州・韓楼地区の画像石(第1図2)、「上刻十字連環紋」長さ 2.40m、高さ 0.58m である。(3)徐州・後周窩地区の画像石(第1図3)、「上刻交龍穿環紋」長さ1.08m、高さ 0.51m である。

第1図1・3は、両端に龍頭が描かれていて、2匹の龍が環をくぐり交わる構図である。第1図2では龍頭は見えないが、図文は明らかに第1図1に由来している。また第1図4は、江蘇省銅山県小李村苗山漢墓の後室を飾る画像石「十字連環花紋」(幅 0.47m、高さ 0.54m)である。これは第1図2と類似したモチーフを呈する。第1図に掲げたそれらを見比べると、2・4の原形が1や3にあることは容易に類推できる。

報告書では、第1図1～3の画像石の出土状態は記述されていないが、第1図4が漢墓石室後室を飾っていることから、同類の用いられ方をしていたと推測できる。

なお、徐州地域にある漢代の碑石墓では、伏羲や女媧、車馬出行図などが描かれていて、それらと同様の昇仙思想などを表わす一連の図文として、上記画像石が用いられている。

直弧文の概観

ここで話題とする直弧文について伊藤玄三氏の著述に詳しい(伊藤 1984年)。伊藤氏は、その起源について、「大正6年の浜田耕作の組帯説以来いくつかの考えが出されてきた。小林行雄があげている主要な説をひけば、浜田の組帯説のほかに西田直二郎の錦綾説、和辻哲郎の漢字説、末永雅雄の皮革縫合説などがあるし、さらには、スイジ貝に起源を求めるものもあった」としている。

そして「直弧文における最古の形態は、現在のところでは吉備方面の墳丘墓出土の特殊器台、楯築弧帯石、さらに近畿地方の古墳出土の特殊器台、鏡向の弧文円板などの文様ではないかと考えられる」、「全体としてこの種の文様は墳墓と関連すること、それはまた前述したような政

治的権威の象徴としての文様として存在していたものとみることができよう」、それは「古墳時代の中枢部である畿内方面において使用され、(中略)畿内中央政権の地方への伸張と関わって地方へもたらされ、時には九州装飾古墳の例などをも生み出したものであろうと思う」としている。伊藤氏のこれらの記述に、本稿で論じようとする直弧文の性格は言い尽くされている。

なお、特殊器台の直弧文について近藤義郎氏は「弧帯文」と呼称しており、「文様のうち横方向に走る弧帯文についてみると、立坂型Bの流動性から向木見型の斜線文による停滞性を経て宮山型の煩瑣性、さらに都月型の分割性がうかがわれる。円筒形埴輪・朝顔形埴輪になって文様はほとんど消える」(近藤 1997年)としている。

直弧文と「龍」・「環」

中国・漢代画像石の「上刻交龍穿環紋」や「上刻十字連環紋」、「十字連環花紋」の図文は、いずれも関連しあっていると思われる。「上刻交龍穿環紋」と「上刻十字連環紋」は、ともに高さが0.58mの規格を有し、徐州・韓楼地区の同一墳墓で用いられていた画像石と見ることができよう。また、「上刻交龍穿環紋」と「十字連環花紋」は、河南省登封嵩山大室闕の画像石(第1図5)で共存使用されている。このような事象から、漢代において、「上刻交龍穿環紋」→「上刻十字連環紋」→「十字連環花紋」へと一気にバリエーションを生じ、かつ共存使用されていたと考えることができる。

これら推移過程の中の一部が、直弧文の図文と似る。特殊器台が「流動性か」ら「分割性」へと推移するとした近藤氏の分析による文様変遷は、江蘇徐州の画像石の第1図1・3から第1図2・4への推移を思わせるところがある。直弧文(弧帯文)は、楯築弥生墳丘墓の弧帯石や立坂B式特殊器台や纒向石塚の弧文円板などに、突如として出現している(第1図6－1～5)。このことは文様出現の契機が、弥生前期や中期の文化要素の中からではなくて、漫来の影響をうけてのものであることを示唆している。

『漢書』によれば、後漢へ弥生時代後期段階の倭国が2度の遣使を送っている。1度目は西暦57年の倭奴国王で、2度目は西暦107年の倭面土国王帥升である。その後には、『三国志』魏書東夷伝が記す景初3年(239年)に始まる一連の魏国に対する「卑弥呼外交」があり、次いで泰始2年(266年)の壱与の西晋への派使がある。

このように後漢に始まる倭国交渉は、続く魏国期に活発化し、西晋期にまで及んでいる。漢代の葬送思想の倭国への伝播は、かかる倭国の活発な外交政策を契機としていたであろうことは想像に難くない。

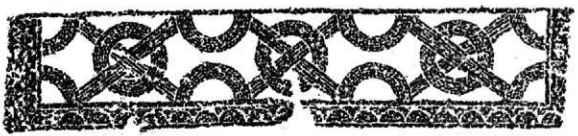
直弧文が、大陸漢代に盛行した「龍」文様を投影したものとすれば、それが「墳墓と関連する」ものであり、また「政治的権威の象徴としての文様」と見なされていたことが容易に理解できる。そして直弧文で飾った特殊器台を墳丘に立てるのは、青龍に通じる「辟邪」の意味をもってのことであろう。また、朝形埴輪の中に直弧文をデフォルメしたものが見られる。それは萱振1号墳や宮山古墳などである(第2図1)。朝形は、有名な福岡県うきは市、珍敷塚古墳の壁画にも見られ、「辟邪」の象徴でもある。

中国の龍は、もともとは辟邪や王権のシンボルとしての意味を有している。直弧文にもそれらが思想として反映しているかのように思われる。

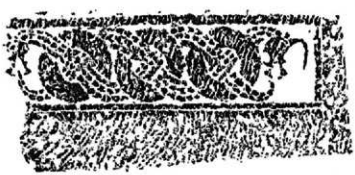
「龍」イメージの出現

ところで、単体の龍をイメージしたと思われる図文は弥生時代から現れる。大阪府の池上曽根遺跡では弥生V期(1～2世紀)に比定される壺形土器の体部に、流体形に手足をつけた図文が描かれている(第2図3)。かかる、弥生時代の龍文について、佐原真・春成秀爾氏は、「東の方向を鎮める、雨を呼ぶ想像上の動物、青龍が弥生時代に到来したのは、西の方向の白虎、北の方向のからみあった姿の亀と蛇(玄武)、南の方向の朱雀とともに、中国鏡の紋様としてでし

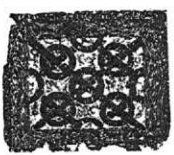
1



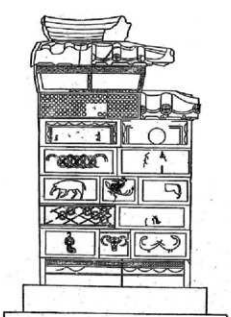
2



3



4



5

6－1

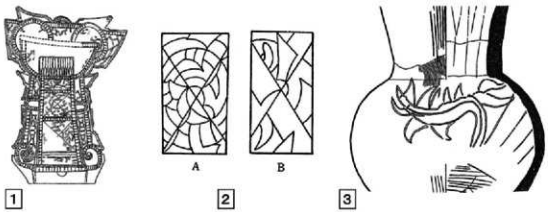
6－2

6－3

6－4

6－5

第1図　1～4 徐州画像石、 5 登封嵩山大室闕、 6－1～3緩向石塚出土、
6－4 楯築墳丘墓出土、 6－5 立坂遺跡出土



第2図 1 奈良県宮山古墳の朝形埴輪、 2－A･B 熊本県井寺古墳石障の直弧文(鍵手文)
3 池上曽根遺跡の壺形土器(部分)に描かれた「竜」

た。竜を弥生土器に描くことは、大阪で始まり、西は宮崎・福岡・東は愛知におよびました」(佐原・春成 1997年，35頁)と述べている。

池上曽根遺跡の「竜」の手足は、弧状を描く先鋭な爪形をしている。そこに描かれた爪形は、伊藤玄三著『考古学ライブラリー28　直弧文』の表紙を飾る“熊本県井寺古墳主室囲み石の直弧文”と類似する(第2図2)。このことからも直弧文は、「竜」のイメージがデフォルメされたものとすることができよう。列島の「竜」は、漢代の龍文化の影響によって出現したとする見通しを持つことができそうである。

おわりに

弥生時代に出現した「竜」の図文は、中国・漢代に盛行した昇仙思想を背景としているのではないだろうか。その思想は、「画像石」に記された龍を基調とする図文とともに、日本列島へもたらされた可能性があると考えている。確かに「龍」文化は中国大陸で先行し、盛行した思想文化である。直弧文や土器への竜文が「龍」と関わるものであれば、少なくとも東アジア世界からの視点は欠かせないであろう。かかる視点については、すでに論考があって考証ずみであるかも知れない。筆者の管見に無いだけかもしれない。

ここで呈したのは、大雑把でかつ単に類似する文様構成を示すといった点にすぎない。彼我の文物をそれだけで比較するのは無謀の誇りがあるかもしれないが、検討する値はあろうと思っている。現在の私には、これ以上の具体的で合理的な説明ができない。大方のご教示とご批正を乞うものである。

【参考文献】

伊藤玄三、1984年『考古学ライブラリー28　直弧文』ニュー・サイエンス社
江蘇省文物管理委員會編著、1959年『考古學專刊乙種第十号號 江蘇徐州漢墓画像石』中國科學院考古研究所編輯・科學出版社出版【参照したのは1982年朝日出版社版】
(財)大阪文化財センター、1979年『池上遺跡 第2分冊 土器編』
近藤義郎、1997年『垣間みた吉備の原始時代』吉備人出版社．145頁。
佐原真・春成秀爾、1997年『歴史発掘5 原始絵画』講談社
蒋英炬・楊愛国、2003年『漢代画像石与画像磚』文物出版社
高橋克壽、1992年「器材埴輪」『古墳時代の研究9 古墳Ⅲ 埴輪』雄山閣

【挿図出典】第1図1・2・3・4＝江蘇省1959年より。第1図5＝蒋・楊2003年より。第1図6－1～6＝伊藤1984年より。第2図1＝高橋1992年より。第2図2＝伊藤1984年より。第2図3＝(財)大阪文化財1979年より。

研究余話Ⅱ　四隅突出型墳丘墓と婦負社会

大野英子
（堆龍文化財センター学芸員）

婦負地域は、富山県を東西に分かつ呉羽山丘陵南部に位置し、神通川を遡上した富山平野の奥地にある。弥生時代後期後葉、この地域には墳丘の四隅が張り出す特異な形状の墳墓が現れた。それは山陰地方に原形をもつ四隅突出型墳丘墓であった。古墳出現期を通して連綿と築造されたこの墳墓は、やがて大型前方後方墳の勅使塚古墳、王塚古墳を誕生させるまでに発展した婦負社会の基盤づくりに大きく寄与した。本稿では、四隅突出型墳丘墓からみる古墳出現期の婦負社会について若干の私見を述べたい。

首長墓の出現

弥生時代後期後葉から終末期、婦負地域には呉羽山丘陵、山田川流域、井田川中流域の3つの小地域集団から成る共同体が形成されていた。彼らがシンボルとして掲げたのが四隅突出型墳丘墓であり、呉羽山丘陵と山田川流域の丘陵上に連続的に築かれた。当時、県内の墓制の主流は小規模な墓が連続する方形周溝墓であり、特定個人墓が集団墓から大きく離脱することはなかった。そのなかで墳丘の規模や形態、あるいは墓域の区別化によって隔絶性をもたせた四隅突出型墳丘墓は、婦負社会の成熟度を際立たせているといえる。

現在、婦負地域には大型（主丘部一辺24～25m※富崎3号墓のみ22m）4基、中型（主丘部一辺20m前後）2基、小型（主丘部一辺14m前後）1基の計7基の四隅突出型墳丘墓が確認されている。ほかに呉羽山丘陵上の3基の墳墓（大型2基、中型1基）もその可能性が指摘されており、これらを含めると計10基を数える。

それではこれらの墳墓に葬られたのは、一体どのような立場の人物だったのだろうか。婦負地域のように複数の集団から成る共同体社会では、水田稲作を始めとした共同作業の指揮、集団間の利害調整、あるいは対外交渉（特に遠隔地域）などに携わる代表者の存在は不可欠である。大型墳墓の被葬者は、墳墓築造に投下する労働力から考えてもその役を担った人物と推測され、婦負地域では最初の首長墓として位置づけて大過ないだろう。また、山田川流域にある中型・小型墳墓や呉羽山丘陵にある未確定の中型墳墓、素環頭大刀などが副葬された大型方形周溝墓の被葬者については、特定の小地域集団の長やムラ長レベルと考えるのが適当だろうが、墳墓の形態や規模に一定の規則性を見出すことは難しく、課題が残される。

移動する首長権

首長墓である大型の四隅突出型墳丘墓は、特定の墓地に集中することなく、転々と場所を変えるように営まれている。また、山田川流域では各墓地に対応する集落遺跡が確認されているが、集落間には目立った格差は認められず、その関係は互いに等質的だったと推測される。これらの点から察するに、首長は特定集団によって世襲的に継承されたのではなく、呉羽山丘陵と山田川流域の小地域集団の間で互選されていた可能性がある（図1）。また、大型墳墓と中型墳墓・小型墳墓・大型方形周溝墓の数量的なバランスからすると、首長は在位中、婦負地域の全体統括と自らが属する小地域集団の指揮を兼務していたとも考えられる。以上のような首長権の流動性や、小地域集団の代表から切り離されていない状況から推察すると、この段階の首長にはまだ絶対的権力は想定できない。したがってここでいう首長は、他を超越する古墳時代の首長とは大きな開きがある。

いずれにせよ、四隅突出型墳丘墓が定着し継続されたことは、婦負地域の首長主導による共同体運営が長く安定していたことを示唆している。首長権の移動は集団間や集団内部

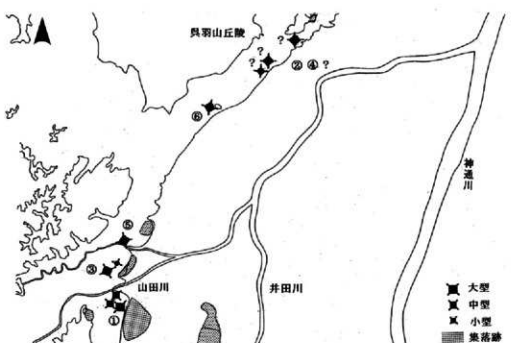
の抗争を抑制しただろうし、またシンボル化した墳墓は共同体の紐帯を強化し、首長の権威を内外に向けて視覚的に示すのにも有効であったろう。等質的集団が寄り合う婦負社会を円滑に運営するには、四隅突出型墳丘墓の造営が重要な役割を果たしていたに違いない。

なお、大型墳墓の数から首長の在位期間を試算すると、四隅突出型墳丘墓の築造期間を約100年間とした場合、4基4代で約25年、未確定の大型墳墓2基を含めるとするならば6基6代で約20年程度と推定される。

まとめ

古墳出現期の婦負社会は、四隅突出型墳丘墓というシンボルを拠りどころとした強固な紐帯の上に成り立っていた。こうした土壌を考えれば、この地域で県内最初の大型前方後方墳の築造がなされたことも極めて自然な流れであったといえる。

婦負地域の墳墓の調査は史跡保護の観点から最小限の調査に留めており、それゆえ掌握されている情報には限界がある。こうした現状において、首長権や社会構造について憶測を重ねることには問題も多いだろうが、本稿ではあえて仮説として挙げてみた。今後、墳墓の実態把握は勿論、集落や出土遺物を含めた実証的手法により仮説を実像に近づけていく必要性を感じている。



	山田川流域	呉羽山丘陵
法仏Ⅱ式期	① 富崎墳墓群3号墓	
月影Ⅰ式期	③ 鏡坂墳墓群1号墓	(②④？呉羽山丘陵No.10号古墳・No.18号古墳)
月影Ⅱ式期	⑤ 六治古塚墳墓	
白江式期		⑥ 杉谷4号墳

図1 大型四隅突出型墳丘墓にみる首長墓変遷の試案

※数字は首長権の推定移動順序で、図と表は一致する
※表の（　）内は四隅突出型墳丘墓の可能性のある墳墓

研究余話Ⅲ

富山城薪丸（たきぎまる）について

古川知明
（埋蔵文化財センター専門学芸員）

慶長期富山城の姿を残す「越中国富山古城絵図」（金沢市立玉川図書館蔵）の富山城本丸の東側出丸には「薪丸」と記されている。その場所は後の絵図に「東ノ丸」「東ノ出丸」「中之御屋敷」と記され、その前身になった郭と考えられており、郭として整備されたのは享保はじめ頃までと推定されている(1)。

初代藩主前田利次は、寛文初年から富山城とその城下の整備に着手した。東の丸の整備はその際計画に入っていたと思われるが、当初は土塁で囲まれていただけであったことが「万治年間富山旧市街図」（富山県立図書館蔵）からわかる。

ところが寛文以前の前田利長の築いた慶長期富山城内郭の縄張りは、大火で焼失以後神通川の浸食を受けて北側が崩壊したため、寛文期の改修の際にはやや南にさがり方向を変えて内郭を作り直したことがわかってきた(2)。

このことにより、慶長期に「薪丸」のあった場所は、寛文期には東ノ丸とその東側に及ぶことになり、東ノ丸と全く同じ場所というわけではないことが明らかになった。

薪丸は「越中国富山古城絵図」では同様な出丸である西の丸より小さく描かれているが、絵図に記載された大きさは、南北 80 間（144m）東西 32 間（57.6m）面積 8,290 平方m。一方の西の丸は南北 60 間（108m）東西 35 間（63m）面積 6,800 平方mで、実のところ薪丸のほうが相当に広いのである。なぜ西の丸より小さく描かれたのか、それは不明である。

慶長期富山城の正門（大手）は西側にあった。したがって薪丸は本丸の背後に存在する出丸という位置づけになり、本丸東側を守る重要な郭であったことがわかる。薪丸と西の丸の違いは、単に位置の違いの問題にとどまらない。本丸を中心に西の丸の手前（西側）には三の丸が存在するが、薪丸の手前（東側）には三の丸がないという大きな違いがある。それゆえ敵が攻め込んできた場合には、西の丸側は三の丸を介して二重の防備となるのに対し、薪丸側は直接攻撃にさらされることになる。この意味で薪丸は本丸を防備するための重要な位置にあり、西の丸よりも大きな郭となるのは納得できる。

薪丸の名付け親は前田利長である。利長は慶長 10 年、金沢の家督を嗣子利常に譲って富山へ隠居し、富山城の築城に着手した。このとき利長は本丸背後を守る重要な郭に薪丸の名をつけた。

薪丸という名前の郭は、それまで利長がいた金沢城にも存在する。位置は本丸の西側、三十間長屋のある本丸附段西側の一段低い郭で、西下方にいもり堀、南下方に玉泉院丸を望む位置にある。

この郭は、利長が金沢在中の慶長 6 年、利常の正室として、将軍徳川秀忠と近江小谷城主浅井長政の娘小督との間にできた次女珠姫（1599-1622）を迎え入れた際に築かれたもので、薪木を入れるための蔵を建てたことにちなんだ郭名とされている(3)。

しかし珠姫の輿入れは、幕府への叛意のないことを証明するため利長が母まつ（芳春院）を人質として幕府へ送った見返りであり、利長にとっては悲哀に満ちた前田・徳川の融和措置であったであろう。利長にとって珠姫の輿入れにちなんだ薪丸の名はまた、母まつとの別離をも意味する名前であったのである。

富山に隠居した利長は、築城後重要な東側の出丸にその薪丸の名を付けた。東国の江戸にいる母まつの面影を富山城の縄張りに投影し、想いを忘れないという意味だったのかもしれない。

注　(1)加藤達行「富山城東ノ丸について」『富山市の遺跡物語』№4　2004
　　(2)古川知明「近世富山城の縄張りについて」富山史壇第 149 号　2006
　　(3)森栄松『金沢城』北国出版社 1970

研究余話Ⅳ

「Asian Games : The Art of Contest （競いの美ーアジアの遊戯）」を見学して

鹿島昌也

（埋蔵文化財センター学芸員）

2005年1月、アメリカ・ニューヨークのAsia Society Museum(アジア ソサエティー美術館)で開催された展覧会を見学する機会を得た。アジア社会の「遊びの文化」の中で遊戯が果たす役割を探求する大規模な展示としては初めての企画で、最新の研究成果に基づいた展示品が集められた。New York Times紙は同展の特集記事を掲載し、ワシントンDCのArthur M. Sackler Galleryでも巡回展が催され、関心の高さを窺わせた。

展示は文化活動としての遊戯の重要な役割を理解するために、特に知力を競う碁と将棋や双六などダイス（さいころ）の目の偶然性によってコマを進める遊戯、ポロなどボールを用いる遊戯など4つのテーマに分けられていた。

展示を企画し、アジア遊戯史に精通しておられる同美術館准館長兼学芸員のColin Mackenzie(コリン・マッケンジー)博士（中国美術史）から次のような教示を受けた。

「双六は、最近の研究で古代エジプトの遊戯『セネト』にその起源が求められ、その伝播の過程で様々な遊戯方法がうまれた。ヨーロッパへ伝わった遊戯はバックギャモンとなり、東方には中国から日本にまで伝わり双六となった。双六は世界の遊戯史を理解する上で大変重要な遊戯の一つである。その伝播途中の中近東やインド、東南アジア、中国でもそれぞれ伝わった地域で独自の盤やルールが発展した。日本の双六盤は、中国に伝わる双六盤と酷似している。」

中近東やインド、東南アジアの展示品を実見するとヨーロッパに伝わったバックギャモンに近い形態を取るが中国やモンゴルは日本の双六に近い形態を取る。

2001年に確認された富山市水橋金広・中馬場遺跡出土の双六盤が、今回の展示会図録に写真・解説付きで紹介された。

Colin Mackenzie博士とAsia Societyで

双六盤は正倉院などの伝世品以外は絵画資料でしか見ることができず、厚板状の完全な形で遺跡から出土した例は同遺跡が日本国内では初めてである。この点についてもアジアの遊戯史的視点からの資料として評価が高い。

同遺跡の安土桃山時代（16世紀後半）の遺構から出土したもので、通常、厚板状の形状をとることから、双六盤として利用された後は加工・転用されるため、盤として遺跡に残る極めて珍しい例であることを博士に話した。

博士によると、日本に伝播した遊戯は、盤・ルールともに大きく発展・進化したものが多く、将棋はコマの動かし方を見ても中国の将棋に比べ格段に複雑化している。

中世以前の日本の盤双六については5種類ほどのルールが推定されている。さいころの出た目の偶然性からコマを進めるゲームで庶民にも広く浸透し、近世以降はその賭博性からか禁止令が出され衰退し、絵双六のみが残っている。同遺跡の双六盤は、実際の使用痕跡があり、調度品として伝世された双六盤とも異なる。実用品として盤上遊戯史研究上極めて貴重な例であると遊戯史学会会長増川宏一氏からも高い評価を受けている。

このように、本市出土の双六盤がアジアや世界の視点でも遊戯史上非常に重要な意義があることが判明してきた。今回の展示を見学し、本市出土双六盤について考察を深めることができ、大変有意義であった。

巻末言 **雑感　富山のまち**

加藤達行

（埋蔵文化財センター所長代理）

総曲輪南地区市街地再開発に伴う発掘調査によって、近世の総曲輪の南の町屋部分の下層から中世末頃の小河川が確認された。注目したいのは、江戸時代初期に整地され、屋敷が建てられたという点である。富山城内の試掘調査からは、中世期の富山城が現在地にあったとの見方が示されている。豊臣秀吉は、佐々成政降伏の後富山城を破却したとされ、前田利長が慶長期に居城としたが、慶長14年に焼失した。その後、寛文期に前田利次が幕府の許可を得て改修し、城下町についても整備を行った。今回確認された小河川を埋め戻地とした時期については、現時点では判然としないが利長期か利次期のいずれかとしても、まちづくりの過程を考えると重要であろう。

ところで、山王社(現日枝神社)については、佐々成政が富山城内から現在地に移し、富山の氏神としたという。覚中町は山王社の北にあるが、町名は江戸時代の本草学者内山覚中が居住したことに由来するといい、田地方のうちとされる。田地方は、もともとは田畑であったところが町化したものいわれることから、中世期からの町とは考えにくい。

また、太田口通りは、天保12年の「富山町方旧事調理」によれば、新川郡太田庄への往来の町端にあたるという。まさに太田への口と理解されていたことをうかがわせる。山王社は、城下町の端に位置し江戸時代に周囲が町化した。つまり、ある時期までは富山の町の南は山王社までであったと考えていいのではないだろうか。

話は飛ぶが、私は、富山は神通川といたち川が合流する地域で、15世紀には富山柳町として一体的に捉えられ、川湊として周辺地域の集積機能を持ち、中世の都市的な空間を持っていたと考えている。近世富山城三の丸にあたる総曲輪1丁目のビル建設の伴う発掘調査によって中世期の水田跡が検出されていることを思い出す。中世の富山は、15世紀から16世紀に湊町として中世的な都市となり、その中心は、小島町・本町周辺を想像する。寛文の富山調理絵図には、木町の北の川岸に「河原」とあることは、利長によって木町が作られ、北にまちが広がっていったことを物語るのであろう。

「富山町絵図」天保2年に加筆
郷土博物館蔵

冒頭の中世の小河川が気になるのは、中世の町が近世の町に作り変えられたことがわかり、富山の町の成立と変遷を解明する手がかりと感じたからである。今回は、思いのまま述べたものであり、今後、諸先生の叱責、ご教示をお願いしたい。

追伸、「越中国富山古城絵図」に城に向かって城下を貫流する流れが見える。小河川とつながりにも思いを馳せたことを記しておく

富山市教育委員会 埋蔵文化財センター所報
富山市の遺跡物語 第7号

平成18年3月15日

編集・発行　富山市教育委員会 埋蔵文化財センター
〒930-0091　富山市愛宕町1丁目2-24
TEL 076-442-4246　FAX 076-442-5810
URL http://homepage2nifty.com/kitadai/（北代縄文広場と兼用）
E-mail maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp
印刷　大栄印刷6株式会社